

▼近刊▲

本多大僧正著

法華經要義

四六判約七百頁
總振かな付美本
【定價金參圓】
送料十八錢

日生現下生知の妙悟、法華經十卷の教義を整理し
極めて平易明徹の講述なれば僧俗共に至寶たらん
◎來四月發賣に付三月二十日迄に『教』發行所への
御振替申込に限り特約二割引を以て送本可仕候

▼豫告▲

統一定價		
一冊	半冊	一冊
金貳拾錢	金壹圓貳拾錢	金貳圓貳拾錢
送料共	送料共	送料共
金前	金前	金前

統一廣告料		
表紙	一頁	一頁
拾五圓	拾五圓	拾五圓
圓	圓	圓
圓	圓	圓
圓	圓	圓

昭和四年二月廿四日印刷納本
昭和四年三月一日發行
（第四百八號）

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地

編輯兼發行人 小林順義

印刷人 鈴木日雄

印刷所 東京府荏原郡品川町南品川四百八十一番地
電話高輪六〇二四番

不許複製

發行所 統一發行所

振替東京五一〇七一番

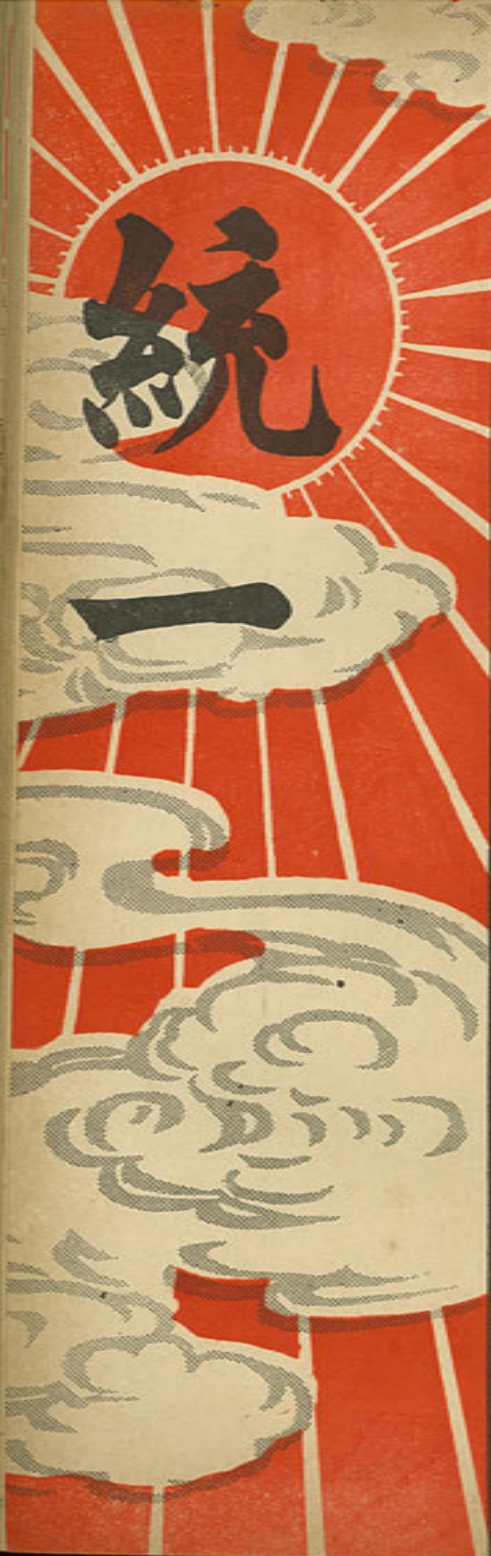
編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

目次

小乗觀に就て.....	本多日生
日什大正師略傳(完結).....	竹内日照
知法思國會第五回懇談會記事.....	
各地教報.....	

第三十四年四月號

統一



小乗觀に就て

大僧正 本 多 目 生

佛教の中に小乗大乘の區別があるといふことは、
廣く知れ渡つて居ることであつて、さうして小乗は
取るに足らないものだといふ風に、小乗を侮蔑する
觀念が非常に強く行はれて居るのであるが、併しそ
れが正當な考へ方であるかどうかといふことを嚴密
に評論して見たいと思ふ。小乗の教に就ての考へ方
が改まらない限りには、佛教は復活し得ないと思ふ
のである。さうして佛教が復活しない限りには、日
本は無論のこと、廣く言へば人類の文化が健全に發
達するか否かといふことが、この一つの問題に依つ
て岐れると思ふのである。

それは從來宣傳せられて居る佛教は、小乗の方面
を切捨て、居るが爲に、頗る實際生活とは交渉が薄

いことになつて居る。大體我が國に於て佛教に與へ
られた諸種の非難の如きは、先づ小乗を忘れたが爲
に起ると言つても宜いのである。佛教が實際生活と
懸け離れ過ぎて居るとか、高きに似て實益が無いと
か、儒者などが盛に論じて居るのも、佛教は空談世
に施す無しと言つて居るが、さういふやうな佛教に
就て起る諸種の批評は、自分の考へるところでは、
小乗を切捨てた佛教であるが爲に、斯様な傾向を辿
り、さうしてその非難を受けるに至つたと思ふ。

今や文化は一轉回して來て、どうしても精神界の
方面をモツと堅實にしなければならぬ。物質文明
の方は相當發達をしたけれども、精神の方面が後れ
を取つた爲に、今の文化は辯づいて思ふやうに健全

なる發達が出来ないのであらう、どうしても物質の方面も發達はさせなければならぬけれども、モツと精神の方面に力を入れなければならぬ。今は政治上の問題でも社會政策の問題がやかましいやうであるが、もう少し考が深くなれば社會教化の問題である。既にその端緒は現れて居るのであつて、防貧政策と言へばどうしても教化事業でなければならぬのである、貧乏人が出来てしまつてからこれを救ふといふことは不可能である、貧乏人を拵へない方法を講じなければならぬ。その方法は一つは産業を興へることであるけれども、根本は人間の人格を造ることである、その人々の自覺を促すことである。産業を興へるのは第二である。人々が人生に處するところの觀念を堅實に造るならば、それが始めて貧乏者を救ふ基となり、貧乏を防ぐ方法となるのである。それ故にこの問題はいま少し考が深くなつたならば、どうしても實際に貧乏人に餅を興へたり、

る。文明建設の要素としては物質と精神の二大要素中に於て、最も重き要素を占めて居るところのものである。
 一人の人間に就て考へても、人間の生活には物質生活と精神生活の二方面がある。どうにか斯うにか食つたり飲んだりしては行くけれども、それ切りでは折角人間に生れた甲斐が無い、どうしても精神に覺醒めて、精神的に満足を得たる生活を遂げなければならぬ、それには宗教がなければならぬ。であるからパンと宗教とごつちが大事であるかといふことになつたならば、最後の決定はパンを捨て、も宗教を採る。即ち日蓮聖人が首を斬られても信仰は捨てぬと言つた所に行くといふと、人間に一番大事なものは信仰である。握り飯が大事か信仰が大事かといふ時分に、信心を捨て、握り飯を採つたならば、一日は生き永へても、その翌日はやはり餓えて死んで行かなければならぬ譯である。幾ら握り飯やパン

貧乏せぬやうに仕事を教へたりするよりも、モツと人々の心得方を良くして行くといふ運動が、實際人生を救ふところの活き／＼した社會事業であり、政治の中心問題であるといふことを了解するに至ると思ふ。

さてさうなつた時に、それを救ふ精神の方面を十分に覺醒めさせて、さうして人間は善い考を以て能く働いて、貧しい時は貧しきに處するやうに、困つた時は困つた時に處するやうに、如何なる境遇に處しても確かりした考を以て、能く働いてまごつかぬやうにして行くといふ、本當に人生を乗切る力を根本から養はしむるものは、即ち宗教である。宗教が無かつたならばその大きな要求は満たされないのである。宗教は決して今日の政治家や經世家が考へて居るやうな、社會の隅にあるべきものではなくして、社會の全面に亘つて、人間生活の全部を包括して、そこに最も大切なる任務を帯びて居るものである。

を得たからと言つて、それで人間の絶対の満足といふものが得られるものではない。信仰さへあればそれに依つて絶対の満足も得られるし、又それに依つてパンも握り飯も得られるのである。握り飯の中からは信心は出て來ないけれども、信心の中からは握り飯も出て來るのであつて、どうしても信仰といふものが人間の精神を造る根本であるが故に、これを文明の中堅に置かなければならぬものである。

この事は十分に人類の文明を研究したならば、古今の哲人は皆なその點へ力を入れたものである。我が皇祖皇宗が國をお開きになつたのも、或は鏡を傳へ、璽を傳へ、劍を傳へられたことも、決してこれはパンを表にしたる神意ではない。鏡を以てパンを説明せんとしても説明することは出来ない。即ち心を鏡の如くせよといふのである、支那の聖人の教と言つても、堯舜が教の根本として「惟れ精惟一」と言つたのは、やはり心を磨くことが根本である。

又孟子が或る王様に對して「王なんぞ利を言はん、仁義あるのみ」と言つたことも、それ等の聖人と雖も物質生活の必要は皆知つて居る、飯を食はなければ腹が減るくらゐのことは馬鹿でも知つて居る、けれども「王なんぞ利を言はんや」と言つた時には、やはり人間の社會は道を以て生命とするといふことを一歩でも弛めたならば、この社會は健全なる發達を遂げ得ないといふことを教へたのが聖人の教である。又釋迦如來が悉多太子の榮冠を擲つて佛道を修行なされ、教をお聞きなされたのも、やはり精神の方面が重いといふことから出家成道をなされた譯ナシである。

そこから考へて來ると現代の一番大事な問題は、人々の満足せしめ得るところの宗教である。弊害の無い、吾々の理智の上に於ても、情懷の上に於ても意思に於ても、吾々の全力を擧げて研究して満足し得られるところの理想的なる完全なる宗教を得て、

大乘宗と誇つて居るところの禪宗に行けば、何だか世の中を馬鹿にしたやうな、徒に上を向いて居るやうな教になつてしまふ、「親が死んだつてそれがなんだ、どうせ人間は死ぬのぢやないか……」といふやうなことで、人生を非常に侮辱して居る傾きがある。又華嚴宗のやうな宗旨に行けば、たゞ高い話ばかりをして、聽いてもわからぬやうな面倒な所に引摺り込んでしまつて、一向人心を濟度する力も無いやうに思はれる、哲學としては相當價値はあらうけれども、宗教としては價値がわからぬ、蜘蛛の巣に引懸かつたやうなことになる。裁きが附かぬものである。天台宗にしても書物は相當立派なものがあるけれども、何が天台宗の生命やら一つも要領を得ない、東京に於ても淺草の觀音も上野の寛永寺も、皆な天台宗であるけれども、彼等は何をやつて居るか、觀音に行つて見たら鳩ボツボが居るといふやうなものである、上野に行つて見たところが

始めて人類は眞の文明を建設し得るといふことが言ひ得られるのである。

さてその理想的の宗教といふことになつたならば世界に宗教多しと雖も佛敎よりほかに無いのであるこれは甚だ獨斷的のやうであるけれども、大體を觀察してそれに間違ひはない。今日人類の間に澤山の宗教があると言つても、先づ印度の婆羅門教、西洋の基督教、それから佛敎といふものが最も有數な宗教である、さうなつた場合に、婆羅門教よりは佛敎が優れて居る、隨つて基督教よりも佛敎が宜しいといふことは、容易く研究し得られることである。それ故に世界に宗教多しと雖も、佛敎は最も完全に理想のものであるといふことが言ひ得られるのである。

そしてその佛敎の内部に入つて考へて見ると、大乘の諸經は最も高き教ではあるけれども、今申す實際の方面に缺くところがあるが故に、我國に於て博物館があるといふやうなもので、何も天台宗としての宗教的行動といふものは現れて居ない。その下に降りたら不忍辨天があるが、あれも辨天様を祀つて居るといふやうなものである。斯様なことは佛敎の教が本當に消化されて居ない、餘りに高いものであるからそれが間に合はなかつたといふことを證據立て、居るものであつて、そこで教の本筋を辿らずして、或は觀音となり辨天となつてしまつたものである。

又淨土宗などは信仰としてはなかく能く説いてあるけれども、これは確かに未來觀的に偏つて、何時も死んだら阿彌陀様が迎へに來て呉れると言つて死ぬといふことを無暗に先に言ふのである。遠慮穢土と言つて、現世はどうせつまらぬものだ、その代り死んだら阿彌陀様がお迎へに來て下さる、船を以て待つてお在りなされると言つて、息を引取つた未來の事ばかり言ふ、そこで往生と言つて、無暗にこ

の人生を離れて先へ行くことばかり考へる。日本の俗語でも「コラ、貴様往生したか」「イヤ、まだ往生しない」といふやうな譯で、往生といふ言葉だけでも非常に嫌やな心持に聞えるやうになつて居る。佛敎が左様な淨土門のやうな厭世悲觀のことになるのも、やはり小乘の敎を侮蔑する所から來ると思ふ。

眞言などはこれ亦妙な敎になつてしまつて、一方は密敎などと言つて説明を超越するやうなことになる。つて居る、大日如來といふのもどういふ佛だか能くわからぬやうになつてしまつた、さうして事實の信仰として、お大師様といふのがあつて、弘法大師を拜むところの迷信に陥つてしまつて居る。そんなものが決して佛敎ではない、眞言宗の本當の信仰がどういふものであるかわからない、仕方がないから弘法大師で間に合せるといふ譯である。大日如來といふことも人格としてはわからぬものになつて、地水火風空識ちやと言ふ、さうなると大日如來といふ佛

は無くなつてしまふので、山でも川でもこれ大日如や、大日の説法とは松ヶ枝傳ふ風の音ちやなどと言ふ、サツバリ佛敎の尊嚴なる信念を維持することが出来ない。そこで有難いといふものはお大師様である、それは極めて迷信的なものである。さういふ事が澤山に現れて來るといふのは、要するに阿含の敎を捨てるが故に、そんなくだらない迷信のやうになつたり、佛と言つても譯がわからないことになつたものである。

日蓮宗もやはりそれに漏れない一つの宗旨になるのである、立派な法華經を有つては居るけれども、阿含の研究を粗略にすることに於て、動もすれば日蓮宗の今の信仰といふものが、鬼子母神の信仰となり、或は帝釋の信仰となり、甚しきはお祖師様の信仰といふやうなことに墮して居るのは、やはり阿含を侮蔑した結果である。阿含に依れば佛敎の正當なる綱格といふものがちやんと立つのである、佛敎を

信する最初の出發點といふものは、決して左様な帝釋とか鬼子母神見たいな婆羅門の神を信じたり、或は佛を忘れて坊さんの一人を信じたりするやうな偏つたことは、阿含であつたならば出て來うが無いのである。必ず先づ三寶に歸依して五戒を受ける、即ち佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依するといふことを皆な言つて居る、佛とは何ぞや、法とは何ぞや僧とは何ぞやといふことを續いて明かにするのである。それをいきなり鬼子母神を信心するとか厄除のお祖師様だとか、そんな事は佛法歸依の入門の法則をも知らぬから起ることである、皆な阿含を學ばざるの失である。これ等のものはどちらにしても五十歩百歩である、弘法大師を拜むのも、お祖師様を拜むのも、道了權現に行くのも、帝釋に行くのも、これ皆な婆羅門の信仰にして、釋迦牟尼が佛敎を聞いた出發點から考へて、皆な邪敎であることは餘りに明瞭である、評論を要しないことである、そんな事

は佛敎を正確に研究すれば直ぐわかることである。然るにそれがその儘今日に通用して居るといふのは阿含の敎を蓋をして見ないやうにして置くものだから、そこで漠然たる押へどころの無い、阿彌陀經一卷が佛敎ちやと言つたり、大日經だけが佛敎ちやと言つたりするやうなごま化しが通用した譯である。阿含が相當な價值を有つて佛敎研究の上に顔を出して來た以上は、論ぜずしてそれ等の誤謬は一掃される譯である。

要するに少くとも日本佛敎の全體が陥つて居る弊害は、阿含の復活に於て除き得られると斷言して差支ないと思ふ、さうして始めて理想的なる佛敎が世に復活して來るのである。この事は決して自分が事新しく發見をして斯様に申すのではない、元來法華經の敎がさういふ意味であつて、日蓮聖人の如きは今自分が論ずる意味合に佛敎をお弘めになつたのである。それが十分に了解されて居ない所に弊害が起

る譯である。

つて居るのであつて、自分は正當に法華經を理解し一切經を理解し、日蓮聖人の道統を發揮するといふ點に於て、小乗觀を明瞭にして置きたいと思ふのである。

そこで自分の説明の内容に入る前に、左様な點を法華經なり日蓮聖人の遺訓なりに依つて證據立て、置かうと思ふ、それに今日時代の必要に依つて自分がさういふことを新に發見して言ひ居るのではない本來さういふ大事な問題であるのに、それが隠れて居つたといふことを明かにする爲めである。

先づ法華經を見ると、法華經は最初方便品から引續いてお經の全體が小乗教を復活して、それが深い大乘の教と一致することを説いたものである、それを除いたならば法華經は何も無いと言つて宜しい。大體は教そのものに就て、阿含の教を十分に發揮して法華經が出来て居る、阿含と法華とは同一の精神のお經である、唯だ一方は少し淺い、法華經はそれ

決して阿含を侮蔑すべきものではない、聲聞の法即是れ諸經の王たるべき地位に上る資格があるといふことを十分に了解するならば、その人は始めて佛様の思召に一致するものである。さうでなくしてどこ迄も阿含を小乗ちやと言つて排斥するやうな考があつたならば、その人は佛の智慧に遠ざかつて、随つて佛教を正當に了解することが出来ぬものであるといふことが説いてある。自分はこの經文のやうな意味に於て、小乗の教を十分に意義あるものとしてさうして佛の智慧に近かんとして法華經の研究をして居る譯である。何も今更自分の新發見であることが物好きに言ひ居る譯ではない、此處に力を入れなかつたのは、佛の智慧に遠ざからんとする愚かな輩のやつて居つた事であるといふことになる。苟くも法華を學んで佛の智慧に近づかんとする者であつたらば、小乗教に對してそんなくだらない考を維持することは出来なかつた譯である。

を十分に説き切つたといふ相違があるだけである。随つてその教の中に現れて來る問題は、人に對する問題として考へる時に、阿含と法華とは全然同じ考へである、佛に就ての考も同じものである、それからこの世の中の有様を解釋することに於ても、阿含と法華とは兩々相照して一層明瞭になる譯である。その事を法華經に於ては能く説かれた。

即ち教の方に就ては法師品に、
是の深經の聲聞の法を決了すれば是れ諸經の王なりと説くを聞き、聞き已つて諦かに思惟せん當に知るべし此の人等は佛の智慧に近づきぬ。
この深經といふのは深いお經、即ち法華經を指すのである、この深い法華經に來つて、聲聞の教を決了して十分に研究し盡すといふと、その聲聞の法即ち小乗の教がその儘諸經の王であるといふことを法華經は説くのである、その説く事を聞いて諦かに思惟すれば、その意味合即ち小乗が即法華經と一致して

それから立歸つて、その意味合に依つて譬論品などを拜讀すると、小乗に説かれた様々な教がその儘法華經の大事な教となるといふことを説いてあるのである、その事は後に十分徹底的に詳しく話したいと思ふが、今はたゞ經文の要點だけを茲に擧げて置くのである。

その阿含に説いたところの四諦の法が一轉してその儘進むと、そこに法華經の實相といふ眞實の教が現れて來るのである。この事は藥草論品に於ても、阿含に説いたところの四諦の教に依つて、未だ度せざる者を度せしめ、未だ解せざる者を解せしめ、未だ安んぜざる者を安んぜしめ、未だ涅槃せざる者は涅槃を得せしむといふことを重ねて説いたが、それはその儘四諦の教ナンである。解せざる者といふのはこの人生の苦しいこと、人生には四苦八苦といふものがあつて、いろいろの缺陷多き人生であるといふことを了解しないことである、その者には了解

を與へる。さうして人生に出て来るのは自分自から
がいろ／＼の業の因縁を造つたが爲に、この人間の
世の中に生れて来たのである、その原因は誰の力で
もない、自分の爲したるところの業の力であるとい
ふことを會得して、そこに自分の心が救はれるとい
ふことが起つて来るのである。随つて善い事をしよ
うといふ所に精神が安んじて、たゞその日／＼うま
い事をして行かうとか、狭い事をして行かうといふ
のでなくして、兎に角善を爲すといふことが、それ
が幸福であり、法悦であるといふやうな精神になり
随つて涅槃の境界に進んで様々な妄想分別が除かれ
て淨き生活に入ることが出来るといふことを藥草論
品に於て力強く説かれて居る、それがその儘阿含の
苦集滅道の四諦の教である。

斯くして考へて來ると、譬論品に於て説かれて居
るが如くに、
諸佛世尊は方便を以てすと雖も所化の衆生は

んでも決して間違ひではない。小學校の生徒といふ
けれども、それは皆な立派な日本國民を仕上げんと
するものであるといふことは、小學校の先生は皆な
知つて居るのである。子供であるからと言つても、
生涯子供で終る人間といふものは一人も無い、今は
幼稚な事を教へて行くけれども、目的は完全な人間
を造るにあるといふ位のこと、佛としては最初か
ら考へてお在でになることである。併したゞ説く方
面が違つて、人生の缺點より説明して覺醒を促すか
らして、小乗の教が消極の如くに見える所があるの
である。併しそれはどこ迄行つても捨てらるべきも
のではない、餘りに日本の大乘佛教などといふもの
は人生の缺陷を指摘しない爲に、却つて弊害が多く
なつて居る事も澤山ある。今日の法華の信者などと
いふものはそれが大部分の禍ひを成して居る。先づ
佛教の信仰に入るには、最初に人生の缺陷を看破つ
て、生老病死の人生であるといふことを自覺して、

皆な菩薩なり。

教へる方に少し淺いやうな事があつたからと言つて
も、聽手の人は皆な菩薩精神を有つて居る者で、そ
れをだん／＼と教へて行き居る中に自然と大乘の教
になつてしまふのである。小學校の兒童と言つたと
ころが大學校の學生と言つたところが、人間に二つ
あるのではない、遂には大學校の學生になつて行く
者を小學校で教へて居るのであるから、最初は鳩ボ
ツホの話のやうであるけれども、その中に自然に日
本國民としての立派な知識道徳を教へんとするもの
である。大學を卒業する時分に小學校の教科書を讀
んで見ても、邪魔になつたり間違つたりした事は一
つも書いてない、大學生が小學校の讀本を讀んで、
此處は間違つて居るとか、これは日本の道徳の上か
ら間違ひであるとかいふことは一つも指摘すること
は出来るものではない、たゞ説き方が簡易に言うて
あるだけのものであつて、大學を卒業する時分に讀

始めて信仰に入るのである。ところがドンドコ法華
の輩といふものはそれを看破つて居ないから、法華
の信心は景氣の好いものだと言つていきなり太鼓を
叩いて居る、そのドンドコ法華の連中は、佛教の入
口の人生觀だも經過して居らないのである。どんな
淺い所と雖も、佛教であつたならばこの人生に就て
人間は一時榮えて居るやうでも、終ひには死といふ
ことがあるから、確かり考へて置かなければならぬ
といふことは、出發點として出て來なければならぬ
ならぬ。いきなり太鼓を叩く輩は死ぬことを忘れて
居る、「死ぬナンで縁起の悪いことはない、法華の信
者が死んで堪まるか」ドンドコ……とやつて居る、
そんな亂暴な佛教があるものではない。それはたゞ
一つの事のやうであるけれども、その一つが亂暴で
あるならば、あとは逆も佛教の教とはなりつこはな
いのである、この人生の缺陷を考へずして佛教の信
仰には入り得ない。

左様な譯であるから法華經の教といふものは、多くの誤解して居る法華信者の考とは全然違ふ。譬論品に於ては三界火宅の譬を説いて、人生は火事の行き居る宅であるといふことを十分に説かれた、さうしてその上に信解を得て人生に闘ふ力が生れて來るのである。たゞいきなり娑婆即寂光だナンといふことを鵜呑にしてさうして、人生の缺陷を考へないやうな信仰は、順世外道と言つて、釋迦以前にあつたところの享樂主義の所謂モダン・ガール式の宗教である。今の法華宗はちようごそのモダン・ガール式の宗教になつて居る、順世外道の式に墮落して居るのであるから、そんなものは佛敎ではない、どうしても一旦人生の缺陷を痛感して、それから立歸つた堅實なる信念でなければならぬ。

そこでこれを日蓮聖人のお言葉に就て通つて見ると、日蓮聖人は開目鈔を書かれても、この法華經の勝れて居る所以は二つの大きな問題があるといふこ

乗はいけない、佛に成れぬと權大乘敎で言ふのは、即ち小乗敎を否定する頭腦がある爲めに、小乗の敎を以て造上げた人格をも併せて否定しようとする、その敎が悪い、悪い敎を以て造られた人格だからお前はいかぬと言つて、二乗を排斥するのである。そこで權大乘敎は小乗を否定する敎であるが、法華經は二乗を許すことに依つて阿含を許す敎であるといふことが明瞭にわかつて來るのである。

それからモウ一つの久遠實成といふことも、これは佛様に就ての顯本であるけれども、その佛といふのは阿含から來て居る佛である、即ちお釋迦様ナンである。釋迦以外の他の佛がえらいと言つて、阿彌陀様に行つたり、大日如來に行つたりするのは、阿含を捨て、居る所から起ることである。阿含の思想といふものはどこまでも釋迦を中心にしたる佛敎である、その中心であつた釋迦が絕對の佛であるといふことを法華經は説くのであつて、即ち阿含の思想

を説かれて、一つは二乗作佛、一つは久遠實成であると言はれたが、その二乗作佛といふのは、當時の人の子目蓮尊者、阿難尊者というやうな人が佛に成り得ないといふことを説いたところの權大乘敎を排斥して、さうして法華經はこの二乗が佛に成り得るといふことを示して、即ち當時の人の子を教ふといふことを明かにされたものである、二乗作佛の二乗といふのは阿含の敎に依つて導かれた小乗の人々を指すのである。そこで人を許す時には、モウ敎を許すといふことが當然伴ふて來るのである、法開會は樂であるけれども、人開會の方が手間取るといふことがある、その人開會を以て二乗作佛といふことが出で來るのである。小乗の敎を學んだ人、その人が立派に法華經の悟りに一致して來るといふことを説くのは、その學んだ敎をも併せて許すものであつて、二乗作佛といふことは即ち阿含の人を許して、法華經に於てこれを認めることを申すのである。二

をその儘絕對にまで導いて來るところのものである。

この二乗作佛と久遠實成の二大敎義が法華經の秀でたる所以であるといふことは、即ち小乗の目蓮阿難等の阿含の敎を修行した人を許し、それから阿含で説いた釋迦、それを法華經に於て絕對の佛と説くのである。その意味合は少しも違はない、法華經の大事な點の二つといふものは、皆な小乗敎の敎を活かすところの思想である、法華經に於て釋迦を顯本とする、その釋迦といふものは即ち伽耶成道の釋迦であつて、これは阿含の釋迦である。二乗といふのは舍利弗、目連、阿難といふやうな阿含の敎に依つて導かれた人である。その人が成佛を許され、その釋迦が絕對の佛であると説くといふことは、これ皆な阿含小乗が法華經と一致するところの大精神である。さうして日蓮聖人は「十法界明因果鈔」といふ御遺文の中に、前に申した法師品の經文を引いて、

この聲聞の法を決了すれば云々といふ經文は、これは「阿含即法華經」といふ文なり」と明瞭に解釋して居られるのである。これは阿含の經がその盡法華經だといふ經文である、故に法華經を學ぶ者は阿含の眞實を認めなければならぬといふことを論證して居られるのである。但だ日蓮聖人の化導全體の上には、當時の風潮から來た影響として、阿含の經文をグン／＼應用せられては居ない、御遺文の中にも阿含經を自由自在に引證してこれを活用せられた跡は乏しいけれども、思想としては今申す開目鈔の二乗作佛と久遠實乘も、十法界明因果鈔の阿含經即法華經といふことも、明瞭に小乗教と法華經との融合を示して居る思想である。

又さうなければ法華經は解釋出來ない、今申すこの思想を除いてしまつたならば法華經といふものは無いのである。法華經の努力して居るところは、全部教としては阿含を活かすのである、事實としては



實相印

小乗は三法印と申して一には無常の印、二には無我の印、三には涅槃の印、この三つが小乗の印であるといふのは印可と言つて、公文書に判を捺して許可するやうな意味であつて、釋迦の判は別に彫つたものは無いけれども、その教の中に説いてある意味合がこの三つの事柄であつたならば、それは釋迦が我が教なりといふ判を捺して證明するも同じものだといふので、これを法印と申すのである。能く坊さんの名前に何々法印などと言ふのもやはりそこから來たのであつて、釋迦の教を間違はずに傳へて居るといふ名前である。

その無常印といふことは諸行無常と言つて、人生に現れて居る事柄は有爲轉變して常住ではないとい

當時の人を救ひ、當時の釋迦を活かし、當時の社會の事實に對して説明を與へて居るのである。隨つて實際人生に於けるところの政治、經濟、生活、産業總ての人生問題を指導して、それに光を與へて行くといふことが佛教になるのである。これを捨てるといふと阿彌陀様の世界のやうな事になつてしまふ。この世界などは石、瓦である、安養世界は黄金の世界で鳥が鳴いて居るといふやうな譯で、餘所の話ばかりが有難くなつてしまふ。阿含の教であれば實際人生の問題に繋がりを執つて教化を與へられて行くのである。

そこでこの小乗と大乘との關係に就ては、その中心の問題が三法印といふことに依つて區別されるのであるから、その法門を少しく解釋して置いて、更にお話を進めて見たいと思ふ。

ふことを説かれるのである。その主なるものは、人間の若い者も年を取るし、壯健な者も病氣に罹るし又老少不定にして死んで行くといふこの人生の事實を指摘したのである。更に擴げて言へば咲いた花が散つて行くし、榮えた木も枯れて行くし、立派な家も灰になるし、大きな都も地震でひつくり返るといふ風に、モツと／＼大きくして言へば、どんな大きな世界でも遂に劫盡と言つて、世界破滅の時が來たならば木端徹塵になつて飛んでしまひ、大海の水さへも燃えて無くなつてしまふといふ、この大きな現實の破壊といふことを佛教では説いて居るけれどもそれもその通りのことであつて、今日の科學の知識から言うても、この地球などといふものは他の火星なり木星なりといふものに衝かるならば、その間に熱を生じて燃けてしまふ、ちやうど日没時の緒い雲のやうなものになつて飛んでしまふのである、それは誰しも認めて居る、星雲と言つて雲のやうなもの

になつてしまふ。そこまで行かなくても、兎に角人間はこの通り皆な死んで行くし、咲いた花は散つて行く、實に有爲無常の人生であるといふことを説くのである。

何の爲に左様な事を説くかと言へば、即ち人生が餘りに愛欲に著するが爲である。第一は男女の慾望に就てモダン・ガール式の觀念が人間には非常に強い、一通りの男女の愛を否定する譯ではないけれども兎角愛慾に着すると言つて、ちようど蠶が砂糖を舐めて居ると言ふか、さういふ風に愛慾の爲に精神を奪はれてしまふが爲に、何もかも特にならなくなつてしまふ。その著慾を醒ますには、たゞ人間といふものはそんな享樂的なものであつてはいかぬといふ言葉だけでは了解し得ないから、そこで事實を指して若い女と雖も年を取るではないか、花嫁さんと言はれて居つても、終ひには顔に皺が寄る、嘘と思ふならば隣家のお婆さんに聞いて見るが宜い、あのお婆

さんもやはりもとは花嫁であつたのだ……それが一番わかりが宜いのである。それだに依つて何等までも人間は若いものではない、「色は匂へど散りぬるを我が世誰ぞ常ならむ」で、過ぎ去つて見れば人生といふものは誰一人として常住の榮といふものはない。而もそれがなかく、早い遠力を以て経過するものである、三十年五十年と言ふ言葉では長いやうだけれども、年取つたお婆さんなどに聞いて見れば「自分が嫁に来たのはついでこの間だと思つて居つたのが、モウこんなお婆さんになつてしまひました」といふやうな譯である。洵に人生といふものはその點に於てうつかりして居ては取返しが付かない、そこでこの人生の深く愛慾に着する者の爲には諸行無常を説くと言ふ、その教が小乗の上に現れて居るのである。ところがこれが法華經に於てこの教を取消すかと言つたならば、決して取消す必要はない、法華經を信じてやはりその通り、隣家の花嫁さんも

お婆さんになる、法華經を信する嫁が何等までも若くてお婆さんにならないかといふとさうではない、やはり顔には皺が寄るし、頭髪は白髪になる、咲いた花はやはり散るのである。これは方便でもなければ嘘でもない、この現實の諸行は小乗教で説かれた通り無常なものである。併し無常だから泣いて居ると言ふのではない、それは阿含でもやはりその通りで、たゞ泣いて居れと言ふのではない、無常であるから早く覺醒めて信仰生活に入れといふことを説く點に於ては、小乗も大乘も同じものである。それを法華經に來たらモウ無常ではない、いきなり「法華は世間相即常住なりや、ナーニ心配はない、家の鳩は死につこはなは」と言つて、鉢巻をして踊り出すといふのは狂人である。いくら法華經を信じて居つてもやはり人間は死ぬのである、そんなくだらない訓世外道式の教を以てしては、佛教を賊することの大なるものである。そんなものは決して佛教の中に棲

息さして置くべきものではない、今のやうな世の中ではそんな者が勝つかも知れない、モダン・ガール式の者が勝つるかも知れないけれども、さういふ所には本當の宗教は無い。宗教といふものはモツと深刻に人生を味つて、さうして人生の缺陷を十分に看破したところから現れて來なければならぬものである。若しも悉多太子が無常觀を起さなかつたらば佛教は起りはしない、毎日々々音樂會でも開いてダンスをやつて、「サア耶輸多羅姫、お前も來い」といふやうな譯で踊つて居るだけのものである。耶輸多羅姫が居られるにも拘らず、悉多太子が夜半に王城を去つたといふのは何であるかといふことを考へなければ、佛教の出發點がわからぬではないか。それを考へずに、たゞ山に入つたといふことを以て悉多太子は厭世的の人間だ、佛教は悲觀的の教だと言つて、憍者などが惡口を言つて居るけれども、それは大きな間違ひである。本當の人生を教はんとす

る者は、この享樂の中に没頭することに對して、百弊これより來るといふ人生の急所を突かなければいかぬ。それは實に世界の多くの教を立てた者の中に於て、釋迦の教が特に光を發する所以である。殊に今日のやうに人生が墮落せんとする時代に於て、この佛敎の諸行無常の教は、光明を發射すると言はなければならぬ。

それから無我の印といふのは諸法無我といふことであるが、この無我といふ言葉はだん／＼擴げて行けばいろ／＼の義理になるけれども、最初これを小乗で説いた意味といふものは、人間には「俺が／＼」といふ一つの我見といふものがある、それはどういふことを意味するかと言へば、大體は慢心、それから執着を意味するのであつて、能く世間で「俺の顔を潰した」とか「それでは俺の損だ」とか、何でも俺といふことの爲に、我慾といふことの爲に一切の間違ひが出来る。それは他の事だと能くわかる、人

屬する迷を解けといふことを説かれるのである。我と言つて俺が／＼といふ執着と、我所と言つて俺のものぢや／＼といふ執着、今日で言へば所有權支配權といふやうなことを餘りに激しく考へ過ぎて居る所に、人間の罪惡があり、社會的の煩悶があるといふことを説かれるのである。「これは俺の錢ぢや」「これは俺の女房ぢや」「これは俺のステッキぢや」……何でも俺のものだ／＼と言ふ、能く考へて見たならば、少しの事情でそれが自分のものになつて居るだけの事であつて、何もそんなに俺が／＼と言つて執著する所は無い、そこをモウ少し程良く物事を考へないといふと、苦しみも多いし、間違ひも多くなる。といふことを教へたのが無我といふことである。そこで大きい所に行つては大願宇宙の主宰者無しといふことを説くのである、主宰者といふのは、この天地宇宙は神様が造つた、人間も神様が造つたといふ、隨つて自分の子なら子は俺が造つた、煮て食

間といふものは變なもので、他人が少し慾張の事をして居ると「あの人は慾が深い」と直ぐ言出す、ところが自分の事になるとわからぬ、愚な事である。碁なら碁を打つて居つても同目八目と言つて、人が打つのを他から離れて見て居るといふと、非常に能くわかる、さうしてうまい智慧が出るけれども、さて自分が盤に向つて石を持つと迷つてしまつてわからない。男女の關係でもその通りである、或る女に懸想したと言つたら、モウその女でなければどうもならぬといふやうになる、傍から見ると、あの位の女は世間に幾らでも居るではないかと言ふけれども當人に取つて見ると、彼女より外に自分の嫁にする女は無いといふやうに、その者の爲に迷つてしまふ。それは即ち人間の我我所といふ執着に依つて迷ひを生ずるのである、その爲に眼が眩んでしまふといふことがある。實際人生に於てはその點が餘程激しいものであるから、釋迦如來はその我見、已れに

はうが焼いて食はうが俺の勝手だ……そんな譯に行くものではない、それは因縁假に和合するが故に、相寄つて夫となり妻となり、親となり子となつて居るけれども、妻は妻、子は子として皆なそれ／＼の存在を認めて行かなければならぬ、たゞ假に事情あつて一緒になつて居るだけのものである。自分の方からばかり考へて、これは俺の女房だ、これは俺の子だといふ譯にはいかぬ、子供の方から言へばこれは俺の親父、これは俺の母親といふことになる。そこに餘りに自分といふことを強く見ると間違ひが起つて來るから、人生は假に因縁相合すれば、そこに現れ、因縁散すれば又別れてしまふものだ、斯ういふ風に人生の執著力を強める爲に無我といふことを説かれたものである。

であるから例へば美しい着物を拵へて嬉しいと思つて居つたのが、近所から火事が出て灰になつてしまつた、それは一通りは悲しむが宜いけれども、そ

の灰を手を執つて、「ア、これが帯であつたか、これが羽織であつたか」と言つて泣くやうなことの無いやうに教へられたのである。この教は永い間國民に餘程能く感化を興へて居るから、日本人が過般の大震災に出會うても、世界の人人が感心するやうに非常に諦めが宜いのである。「ナーニ木で拵へた家は焼けますワイ」着物も火には焼けますワイ、何も不思議はありませぬ」といふやうな顔をして握り飯を喰つて居つたといふ所は、これ皆な佛教から教へられたところの觀念である。西洋人であつたならば逆もさうはいかぬ、燒跡に立つて、「ア、此處に自分の家があつたのだ」此處に私の着物があつたのだ」と言つて泣くけれども、日本人はそんな事では泣かない、握り飯を食つて笑つて居るといふのは、即ち佛教から興へられた教に依つて、人生は有爲轉變のものであり、一切は和合に依つて生じ、和合散すれば消滅してしまふといふ人生觀を興へられて居るか

らである。それが無我といふことである、何も禪宗坊さんの言ふやうに、無我といふのは、人間は魂も何も無い、幽霊見たいなものだといふことではない、我見を滅め、而して一つのものが中心になつて他を支配するといふことはいかぬ。家の内でもその通りで、亭主が一家の中心で、これは俺の家だといふことは宜いけれども、どこまでも「俺は主人だ、女房などは焼いて食はうが煮て食はうが勝手だ、チア貴様羽織を脱げ、質に打込む」といふやうなことを言つて何もかも自分の勝手にしようとする。さういふことはいかぬ。一軒の家庭と雖も皆それ／＼の力が相合して出来たものである、自分一人では立つて行くものではないといふやうに、所謂人生の協力和合といふことを教へるが爲に無我を説くのである。斯ういふ教が法華經に來て變る譯が無い、やはり法華經でもその通りのもので、法華經を信じたから

と言つて我見を警めなくとも宜しいといふ譯にはいかなない、だからこの無我の印といふものはやはり法華の教にもある譯である。

それから第三の涅槃の印といふのは、涅槃は梵語であつて、譯すれば滅度といふのであるが、滅度とはつまらない考が無くなつて、大體善い考へ、即ち悟りの一部分に入つて行くことを涅槃といふのである。それも入口の涅槃と完成した涅槃とに依つてはいろいろの相違もあるけれども、大體信仰の生活に入つて、無暗に人生の事柄に動搖を受けない、十分に信心をし、了解をして居るから、人生の變轉に對しては、悲しむべきは悲しみ、笑ふべきは笑ふけれども、モウ一つ奥に動かない大きな精神が控へて居る、例へば女房が死んで涙を流して居る、友達が心配して「君は細君が死んで、それが爲に精神が狂ひはせんか」いや、大丈夫だ、狂はんものが精神の奥に控へて居る、餘り笑つて居つても世間態が悪い

から泣いて居るが、泣いて居るのが俺の精神の全部ではない、この奥には女房が死んでも泣かぬやうな大きな精神が種々として控へて居る」といふやうな所に行けば、それが一つの涅槃を得たといふのである。或は火事で家が焼けたといふ時分に「ア、惜しい事をした、保険を掛けて置けば宜かつたが掛けなかつた、つまらぬ事をしたナ」と思ふ位のことはあるけれども、「ア、モウこの家が焼けたら俺の財産は灰になつてしまつた、首を吊つて死んでしまはうか」……そんな氣分にはならない「ナーニ保険を掛けなかつたのは、焼けてもかまはぬといふ一つの勇氣があつて俺は掛けなかつたのだ」といふ位に、一旦は悲しむやうでも、その奥にそれ以上の強き精神があつて動搖を受けなければ、その人は一つの涅槃を得て居る人と言ふのである。さういふ觀念を佛が教へられたことは、法華の教に來てもやはりその通りのものであつて、何も小乘

のさういふ思想が邪魔になるものではない。

然らば實相印といふ法華の教はどういふのであるかといふと、この三つの意味合を確かり纏め上げて教へたものであつて、人生の事はいろ／＼遷り變るやうに見えても、モウ一つ考へれば遷り變るものではないといふ所に歸つて來るのである。つまり人間は諸行無常ではあるけれども、その無常の奥に常住なるものがある、波は起つて消えるけれども、その波であるところの水は何處までも續いて行くが如くに花は今年散つても、又來年咲くが如くに、この咲いては散り、散つては咲く花を連続したならば、花といふものは常住である。然らば小乘の場合に於ては生滅無常といふことを言つて、一切のものは始め有り終り有るやうに考へたのかといふとさうではない。無常の側を説いて反省を興へたわけのものであつて、釋迦の觀念には、最初より生滅無常の中に滅びないものがあるといふことは無論知つて居るので

ある。左様な事は小乘の教を説かない中から知つて居る、生滅無常のモウ一つ奥に滅びないものがあるといふことを發見しなければ、宗教にはならないのである。小乘と雖も勿論宗教である、釋迦は人を教へんとした者であるから、たゞ生滅するだけのものぢやないといふことで、「有爲の奥山今日越えて」といふことが無いならば教を成さない、人間が死んで行くあゝ悲しいと言つて泣くだけのことである、少しも人をして安んぜしめることは出來ないではないか。だからこの遷り變る人生を見たばかりではない、そこにやはり遷り變る奥に變らないものがあることを知つて居る。釋迦が悉多太子として最初に王城を出て迦藍阿羅邏仙人を訪ねた時にも、迦藍阿羅邏が言ふには、人間は業から生れたといふことを説いた、その時に「然らばその業は誰がつくつたか」と悉多太子は尋ねて居る、「それは人間がつくつた」とその人間は誰がつくつたか「それは業がつくつた」然らば

業が先か人間が先か」といふことを突込まれて、迦藍阿羅邏は答へることが出來なかつた譯である。左様な事々らるは釋迦が悉多太子として王城を出られたその翌日言つて居る事である。人は生れては又死ぬ、花は咲いては又散るが如く、生滅無常と言ふがこの無常なるものが何故に又來年花が咲くか、物に生滅あればその奥に不生不滅のものがあつて、一波起つて一波倒れるけれども、その奥には滅びざる水があるといふ位のことは釋迦は最初から知つて居る

の奥に不滅實在の世界のあることは十分に御承知になつて居る譯である。

左様な眞理ぐらゐは何も修行を積まなくても、迦藍阿羅邏に居る間の學問に於て、既にその位の事は了解して居るのであるから、それが遂に悟りを開いて阿含の教をお説きなさいといふ時分に、單に物の生滅の一面だけを見て、不滅の側を御承知なさらないといふやうなことがあるべきものではない。諸行無常を説かれるのは、この人生を教化せんが爲に人生の無常の側の驚きを興へられるものであつて、そ

又釋迦如來は自からの涅槃に依つて驚きを興へられた、釋迦と雖も斯の如く涅槃に入るのである、ましてや人間は何時死ぬかわからぬといふことを事實に示された。併し自分が涅槃に入るから消えてしまふといふ意味ではない。これも亦法華の教に於ても同じ意味合である、佛すら涅槃に入り給ふ、人間は生死無常は當然の事であるといふ考を有つことは人生に於て何も差支のない事である。釋迦は入滅するけれども、併し不滅の如來であるといふことは阿含にもちやんと説いて居るのである。その點を十分に味つて見るならば、實相印の中に於いて諸法の無常なるが如く差別せる世界に、不滅の有様を見て行くといふこの諸法實相といふことは、やはり阿含の教の中にもある譯ナンである。それを表面の方から無常々々と言つたけれども、無常の奥に常住がある

といふことは、阿含に於てもハツキリ認めて居るものである、その事をいふ少しく詳しく話して見たい。

一言にして言へば、釋迦が無常の側だけしか知らないで常住を見出し得なかつたとするならば、決して宗教を説くことは出来なかつた。彼が人々を導かんとして、我に來れといふやうなことは言ひ得なかつたであらう、たゞ多くの人間と同様に死んで消えてしまふ、同じやうに悲しい事であるといふだけである。普通の大乘の人々が、小乗は空無に歸するものぢやと言ふけれども、空無に歸して無くなつてしまふといふやうな事であつたならばそれは絶望であつて、決して人を導くことは出来ない、あゝいふ言ひ方は最も間違つた事である。どんな淺い宗教でも人間が消えてしまふと言つて立つて居る宗教は無からう。それはそこまで考が及ばないで、どちらとも言はないものはある、例へば天理教見たやうな低

級なもの、人が死んだらどうなるかわからない、それでもまア甘露台上つて楽しい事が出来るといふくらゐの事は言ふのである。その考の及ばない所はあるけれども、苟くもその事を考へた時には、死んだら消えてしまふといふやうな事では宗教を成さない。

それ故に阿含の佛身觀を調べて見ると、増一阿含經の中に、

肉體は逝くと雖も法身は在せり。

と説かれて居る、釋迦如來の肉體は人間と同じやうにお逝くなりになるけれども、併し法身の佛、即ち人間の肉體でない佛としての人格者はやはり存在して居られるといふのである、又

如來の法身は敗壞せず、永く世に存して斷絶せず。

肉身は跋提河の邊りに涅槃せられたけれども、その法身は決して斷絶するものではない。又

如來の體は金剛の所成にして十力具足せり。金剛の所成とは消えて無くならないといふことを意味する。又

肉身滅を取ると雖も法身は存在す、當に念じて奉行すべし。

釋迦如來の肉身は生滅せられるけれども、法身の佛は何處にでもござるのだから、やはり信仰を有つてその滅びない釋尊を仰いで、その佛様に助けて貰はなければならぬといふことを言つて居る。それから又維阿舍經の中には、

如來の體身は法身の性清淨なり、法燈常に世に存して此の愚痴の冥を滅せん。

如來の身といふものはやはり滅びない體であつて、而も清い尊いものである、そこでこの佛は肉身は茶理したけれども、その法身の佛はお在でになる、さうしてその思召は教となつて世に傳つて居るから、不滅法身の如來を念じて、説き置き給ひし教を傳う

てこれを信すればこの人生の冥はそれに依つて除かれる、斯う説いたのである。又増一阿含の中に、

如來は大慈悲あつて衆生を愍念し、一切衆生を捨てざること母の子を愛するが如し、設し當に人あつて請すれば如來は便ち來りたまふ。

釋迦如來は慈悲の強い方であつて、吾々をお捨てなさるゝことは、母親が子供を捨てないと同じ事であるから、衆生に信心の心があれば直ぐお出で下さる譯である、この「便ち來りたまふ」といふことは、眼には見えないけれども、感應顯著であることを申すのである。又小乗の異部宗論論といふ、小乗のいろ／＼議論が岐れたことに就いて後に書かれた書物の中に、

如來の色身は邊際なし、如來の威力も亦邊際なく、諸佛の壽量も亦邊際なし。

佛様の身といふものは決して有限なものではない、壽命も有限なものではない、非常な勝れた御方であ

り、永く壽命を保たれるものであると説いて居る。斯様に小乗だからと言つても、釋迦が拘尼那城頭に涅槃したから、それで消えて煙と同じやうになつたそんな事を考へたものだといふやうなことは、實に考へる者が餘程愚かな話である。小乗と雖も苟くも宗教として起つたものは、その教主釋尊が涅槃して煙になるといふやうな事を言つて、それで信仰が満足し得られるものではない、到る處に肉身は逝くと雖も法身は在ませりと言つて渴仰したものである。然るに日本の大乘宗と稱するものは、一概に小乗は佛身は無常である、大乘に來つて常住ちやと言つて嘘ばかり言つたものである、それが皆無學の者の言ふことである、次に人身觀に就て、即ち人間を觀る上に於てはどうであるかといふと、その大事な問題は後に佛性となつて現れて來るけれども、小乘に於ては罪の側から業感緣起と言つて、人間は罪の塊りである、だからこれを打壞してしまつて、身を灰

にしてしまひ、智慧を煙にしてしまひ、靈魂を無くしてしまつて、綺麗サツパリ、身も心も吹き飛ばしてしまへ、さうすればモウ思ひ残すことは無くなると言つて、まるで社會主義者が破壊的の議論を吐くやうなことを言つて、それが小乗の人身觀ちやと一般に言はれて居るのであるが、これも實に無茶な話である、左様な馬鹿なことではない。やはり小乗と雖も人の心は淨いものであつて、本性清淨なりと説かれて居るのである。人間の本性は淨いものであるといふ、そこに蓮華の譬が説いてあるのである、蓮華は泥の中に生えても、少しも泥に穢されなで、だん／＼成長して淨き華を開くが如きものである、人々の心の中にはその道を有つて居ると説かれるのである。

それは最初佛がまだ法を説かない時に、人間の心は餘りに穢ないナと考へた、それを穢ないと思つた儘ならば、法を説かずに寧ろ疾く涅槃に入りなると

いふことであつたけれど、もモウ一遍考へ直して見たところが、穢なく見えるのは表面であつて、その裏に立派な清い精神があるといふことを發見して、茲に希望を繋いで、始めて法を説き出したといふのが佛教である。であるから小乗と雖も人間の心にさういふ本性清淨なるものがある、蓮華のやうなものである、さうして蓮華は「日現すれば紅蓮敷き、月出づれば白蓮榮ゆ」といふやうに、釋迦は日となり月となつて、人々の心にある白い蓮、紅の蓮のその芽を開發させてやらなければならぬといふ活動をなされたのである。

異部宗輪論に於てもこの問題が論究されて居る、或る小乗の人は本性清きものであると言ふし、或る者は人は罪業の塊りであると言ふが、どちらが本當であるかといふことに就て議論を闘はして、結局異部宗輪論に依れば、それはどちらも嘘ではないと言つて居る。釋迦如來は人間に二通りの氣性のあるこ

とを御覽になつた。非常に反省力が強くて意志の弱いやうな人間がある、私のやうな者は逆も仕方がない、悪い考へは起すし、悪い事をして、甲斐性の無い者で逆も浮ぶ瀬は無い」といふ風に滅入り根性の者がある、さういふ者の爲には「ナーニ心配はない表面は泥でも心の中には蓮があるぞ」といふこの希望を與へてやらなければならぬ。ところが一方には又そんな事は言はない、いきなり慢心して居つて、「ナーニ私は頭ナンか低げませぬ」と言つて、自分には少しの悪い事をした事の無いやうに思つて居る慢心すつた人間がある、その人間には「汝の心の中には斯の如き煩惱あり、罪惡あり」と言つてその缺點を指摘して反省を促さなければならぬから、その方からは「汝はこの世ばかりではない、前の世にも惡業を爲して來た罪の塊りである、その業煩惱といふものが靈魂にくつ附いて居るから、ちよつと心が動けば穢なことはない、毒氣妄想となつて現れて來

るぞ」といふ風に説かれるのである。斯の如く釋迦は人間そのものに積極性の者と消極性の者があるから、消極性の者に向つては本性清淨を説き、積極性の慢心すつた者の爲には罪惡を説いてこれを導かれたので、この二つの教は俱に効用を成すものであつて、永久に佛敎の敎訓として差支のないものだといふことを書いて居る。これは法華の立場から言つてもやはりその通りである、今の法華の多くの信者などは少し慢心すつて居るから、罪業の側を十分に説いて聽かせなければ、眞の佛敎徒にはなり得ない譯であらうと思ふ。

法華經の中に見ると、方便品に於ては開佛知見を説くし、それから譬喩品に至ると、直に三界火宅の教を説いて、火事の行き居る家の内に、玩具に氣を奪られて居る淺ましき有様を示されて居る。これが兩々相俟つて法華經の教を成すものであつて、たい方便品の開佛知見の一面だけを知つて、三界火

宅の譬喩品の方を知らぬといふことになれば、それは法華の半面しか知らない者といふことになるのである。であるから法華信者は煩惱罪惡の側と、佛性の頼みある側とを考へて、佛性を聞き迎へて罪惡を滅めるといふことに努力しなければならぬ。この佛性の頼みある側だけを知つて、罪業の恐るべき側を全然忘れて、白酒を飲んで踊るやうな事ばかりやつて居つては、完全なる法華の行者とは言へない、罪の側の誠しむべき事と、佛性の側の頼みある側とを信じて、兩々完全に心得て行くのが法華經の修行である。

斯様に考へて來ると、大事な問題は悉く阿含の教と法華の教が一致するのである。尙ほその他の事に就て申しても、例へば阿含は利己心であつて、大乘の教は菩薩行であると普通に言ふけれども、それも大問違ひの話である。阿含の教と雖もどこまでも慈悲を根本にして、利他の精神を教へられて居るも

のである、阿含に依つて修行した羅漢であらうが、又羅漢に至らなくても、佛敎の入口の今日始めて掌を合せたといふ者でも、單に利己心に依つて佛敎を信じたやうな者は一人も無い。左様な間違つた事を誰が言ひ出したか、羅漢などといふものは實にえらい者である、殆ど佛の悟りに近いやうな人を言ふのである。そこまで行かない、今日始めて佛敎の信仰に入つたといふ一番淺い信者でも、やはり最初に五戒といふことを守るのである。最初に五戒の第一に不殺生戒といふものを教へる、不殺生といふことは、消極的に言へばものを殺すなどいふのであるけれども、その精神は慈悲の心を説くのである、佛敎を信する以上は優しい心を以て、物を傷めたり、殺したり、さういふ残忍酷毒なることを第一に諷めなければならぬ、これが佛敎の入口の所で教へることである。況や羅漢の聖者に至れば非常な行を積んで、あらゆる立派な人格を磨き上げたもので、これ

を物を憐れむの精神が無いなどといふほど頼りな議論は無いと思ふ。

今その愉快な反證を一つ擧げて見ようと思ふ、それは前に言つた三法印を少しく變へて釋迦が或る場合に説かれたことがある。婆羅門の者が釋尊の所に來て言ふには、「どうもあなたの説教で私の方の信者がドン／＼改宗してしまつて困る、何とかして安協したい、私の方は名譽を失はぬやうにして戴いたならば、あなたの教が弘まつて行つても宜しいが、頭から貶しつけられてはごうも食ふにも困るやうなことになるから、何とかうまい工夫はありませぬか」と言つて、婆羅門が釋尊の所に泣き附いて來た。その時に釋迦以來は非常に度量が大きい方であるから、「自分は何もお前等を故意に困らせる爲に言ふのではない、俺の方は名譽も要らなければ利益も要らない、だから俺は婆羅門の傳道者の一人であると吹聴しても差支ない、併しその婆羅門の教といふもの

内容は、俺の考へて居る事を言はして呉れなければ困る、教の内容をごま化すといふことは出来ない、俺は婆羅門の手先である、婆羅門の口儲取であると言つてもそれはかまはぬが、但し教は斯ういふ意味であるといふことに就ては俺の説明を認めなければならぬ、どうだ」と言はれた。婆羅門の者は「さういふことは一向差支ありません、それではどうか婆羅門僧、婆羅門の教といふ名前をやつて貰ひたい」「宜しい、それでは俺の方は簡単な事だ、三つの事柄を承認すればそれで宜しい」といふ談判をせられた事が阿含經の中に書いてある。その三つといふ中の二つは、前の無常の印と無我の印の二つで、これは既にお話した通りのことである、それが第二と第三に擧げてあつて、その第一は「不殺の印」と釋尊は言うて居る。我の説く婆羅門の教は物を殺さないといふことでなければならぬ、殺さないといふことは極端に言ふのであるが、要するに虐めない、性の

悪い事をしない、慈悲心に飲けたやうな事はしないといふ、人間の慈悲の精神を説き切る所に婆羅門の教があるのだといふことを言はなければいかぬ、無暗に豚の股を喰ひながら酒を喰つたりすることはいかぬ、さういふ残忍酷薄なることは一切嚴禁するものぢやないといふことが一つ、それからあとは諸行無常と諸法無我、この三點を承認するならば宜しいといふことを申して居る。その位に釋尊の標榜する教といふものは、五戒の初めに於ても不殺生戒を説き、三法印を婆羅門と妥協する場合に於いても、不殺の印を認めぬ限りには、俺は妥協せぬと言はれた位のものである。この不殺といふことの精神は、物を殺さないといふのは消極的に言ふのであるが、これは即ち慈悲を言ひ表す言葉であつて、積極的に言へば物を皆な活かし、救ひ、助ける慈悲の行動を以て佛敎の生命とするものである。

その意味に於て小乗の教が利他の精神が無いとか

優しい精神が無いとか、自分だけ世の中を厭うて逃げ込んで行くものだと言ふのは實に滑稽な話である。それは小乗にも何も限らぬ、抑々釋迦牟尼の教が第一回の説教からして、世の中を救ひ人を救ふといふ教を説かない所があるものではない、自分だけ助かるといふやうなことに佛敎を考へるのは、洵に觀方の間違つた話である。又どんな淺薄な教でも、宗教といふものは自分だけが助かるやうに見えても直ぐにその精神が人に及んで行くもので「あなたも斯うなさつたらどうですか、大層心持が宜しうございますよ」といふやうなことになつて現れる、個人解脱の如く見えるものでも、その個人解脱の事柄が直ぐに他の人にその法悦を分たんとするものである。

況や阿含の教の如きは「慈、悲、喜、捨」の四無量心といふものを説いて、全く慈悲の心なるべからずといふことは到る處に説かれて居る。これを

「普慈」と申して普き慈悲を説かれて居るものである、東の方に向いても慈悲を行へ、西に向いても、南に向いても、北に向いても慈悲を行へといふやうなことを言はれてあるが、それは親に對しても優しく、兄弟に對しても優しく、近所の者に對しても優しく、兄弟に對しても優しく、それを方角で言ふから即ち十方悉く成就するといふ言葉を使ふのである、その東といふのは親に當るとか西といふのは妻子に當るとかといふやうな説明があるのであるが、一々親とか妻子とかいふ言葉を略する時には、東西南北四維上下の十方悉く慈悲を以て向へといふ言葉を使ふのである、即ち向ふ所これ皆な慈悲といふ譯である。これを普き慈悲と申すのであつて、何も妻子眷屬ばかりではない、往來を歩いて居つて車挽に出會つても納豆賣に出會つても、出會ふ所悉く慈悲の精神を以て對するといふことが小乗の教である。佛敎といふものが元來それなのであつて、一言に

して言へば釋迦の教は慈悲の教である、それは阿含の第一回の説教より、入滅涅槃の説教に至るまで一貫したるもので、佛の心とは慈悲心なり、佛の教とは慈悲教なりといふことになるのであるから、小乗が決して慈悲から離れて居るなどといふことは言ひ得らるべきものではない。

その事は私が『大藏經要義』の阿含觀の中に詳しく證據を擧げて、あり餘るほど澤山の證據を擧げて置いたが、それは阿含に依つて佛教を信じた人達が爲したる事業といふものが擧げてある。今日の日本佛敎は、佛敎の名に於て爲したる事業が甚だ貧弱であるけれども、阿含經の弟子品に擧げて居る所を見ると實に盛な事業が行はれて居る、それはあらゆる事業をやつて居る、今の社會事業もあれば、教育事業もあれば、その他宗教の事業、何でもある、殆ど文化建設の事業の全部を包括して居る。王様も佛敎を信するが爲に善き政治を執り、富豪も佛敎を信

するが爲にいろいろの事業を爲し、おかみさんも娘もお婆さんも皆なそれ／＼分に應じたる事業を爲して居る、今のやうに信心はするけれどもポカンとして居るといふやうな非活動的な宗教ではない。そこには約百八十人ほどの特色ある人とその事業のことが出て居る、その斯ういふ仕事をした、あゝいふ仕事をしたといふことが書かれて居る所を見るとそれは皆な所謂世を救ひ、人を濟ふところの活動である阿含の教に依つて導かれた人達がそれだけの仕事を實際にして居るのである。今日の日本佛敎は大乗佛敎だなど言つて威張つて居るが、何の仕事もしないで、皆な同じやうに寺の中に閉籠つて法事と葬式だけを目標にして、鉦を鳴して塔婆を書くことばかりやつて居る、さうして阿含は小乗ぢやと言つて嘲つて居るナンといふことは、實に暢氣な話である、斯ういふ貧弱なる日本佛敎の状態こそ眞に愧づべきことである。

日本でも最初奈良朝の時に佛敎が始めて渡來した當初といふものは、斯様な状態ではなかつた、聖德太子が始めて佛敎をお弘めになつても、いきなり四天王寺を造り、そこには社會事業もあれば或は病院もあれば、いろいろの設備が出来て居る、その他工藝美術に至るまで、佛敎を通して建築も盛になれば、繪畫も起り、大工の師匠であり、左官の師匠であり、一切の事は佛敎を通して聞かれて來た。醫者もその中から出て來る、あらゆる人類の文化といふものはそれに依つて開發されたのである。それから善き坊さんが全國を歩いて、至る處に道を撃き、橋を架け、或は温泉を發見したり、いろいろの事をして國民の文化を造り成したのである、又百姓が作るどころの作物、大根でも茶でも皆な坊さんがさういふ産業を獎勵する爲に、到る處に宣傳をした事が始まりである、今の坊さんは何もしないではないか。東北のやうな邊鄙な際までも、今日相當の文化

が開けて居るといふのは、其處に百姓が蒔いて居る大根でも、或は爺さん婆さんが讀んで居る書物でも、皆な坊さんが教へたものである、その當時には學校も無ければ役人も居らない、たゞお寺が出来て坊さんが居つて國民の文化を開いたのである。さういふ盛んなる事業が最初の日本佛敎に於て爲されて居るに拘らず、それより數十年の歳月を経て大に發達したと言はるべき佛敎が今日の有様であるといふのは、實に情けないことである。

要するにこれは鎌倉時代からの戦亂の影響を受けて、十分の宗教の活動が出来なかつた爲でもあらうが、又一つは徳川氏の政策に依つて佛敎を葬祭専門のものにしてしまつて、社會的の活動をさせないやうにした結果でもあらう。何れにしてもこれは變態である、どうしても今後佛敎が存続して行かうとするには、今申したやうに第一に小乗の教に對する觀念を明かにして、實際の人生に連繫を取つた宗教と

して復活しなければならぬ。それが爲にはどうして
も法華經に據らなければやれないのである、大日經
だとか阿彌陀經だとか般若經だとか、そんなものに
據つたならば、いきなり阿含と衝突してしまふ、ど
つちも背中合せで一方は「ナーニ阿含の教などは小
乗でつまらないものだ」と言ふし、阿含の方からは
「ナンダ、そんな迂遠なものは駄目だ」といふこと
になつて、少しも握手することが出来ない。

これが法華經に據りさへしたならば完全に握手が
出来るのである、阿含とは言ふけれども、佛敎の大
事な經典が二千卷もその中に含まれるのであつて、
それは一々釋尊の説敎せられた活きた佛敎である。
地藏經や阿彌陀經といふやうなものは、後に出来た
ものが大部分であるし、その内容も偏つたやうな事
である、そんなものを表面に立てたならば妙な佛敎
が出来てしまふ。阿含の敎は實際人生に對して行は
れた敎であるから、日常の人の世に現れて来る事柄

に就ての敎が滿ち充ちて居る。その二千卷の阿含の
敎が活躍して法華經と協力し、又大涅槃經のやう
な理想の敎法が華經と協力して、阿含、法華、涅
槃の三敎が握手して復活したならば、それが始めて
眞の人生を敎ふべき敎であらうと思ふ。

日蓮門下の人も早く思切つてこの點を明かにしな
ければ、日蓮門下もやはり過去の宗敎として滅びな
ければならぬと思ふ。今迄は日蓮聖人の經歷、御傳
記の影響を以て、割合に日蓮門下には熱があるけれ
ども、その思想の内容といふものは甚だ貧弱になつ
て居る、たゞ日蓮聖人の命懸けの奮闘といふものが
一種の熱を與へることに依つて、日蓮門下には力が
あるやうに見えるのであるが、その思想、その感情
の内容に入つて見た時にはあまり立派なものではな
い。それは坊さんが大體敎の内容を十分に説かなく
なつてしまつて、説敎や演説は説敎坊さんといふ講
釋師の受賣みだいなものに永い間やらして居つた。

説法者といふものは、ちようど今日の講談師か落語
家の手先ぐらゐの者で、それ程上手には出来ないけ
れども、學問も何もしないで、たゞ口のたつしやな
者が、原稿を小説家のやうな者に書いて貰つて、そ
れを誦讀してやつて居つたに過ぎない、さうして龍
の口の頸の座の話などを繰返して、馬の脚音高くバ
カ／＼ツ……といふやうなことを言つて喜ばして來
た。その時代は活動寫眞といふものも無く、講談落
語といふやうな娛樂も簡單に行はれない時代に於て
軍談や講釋の代りに日蓮聖人の御傳記を説いて、法
華の信者を繋いで居つたのである。だから空元氣の
やうな所ばかり敎へられて來て、本當の内容といふ
ものが無くなつてしまつた。こんなものを以て將來

の宗敎として、日本並に全世界に對して佛陀の敎が
人心を救ひ得るかと言つたならば、到底そんな事の
出来るものではない。これは唯だ豆絞りの鉢巻をし
た阿哥連の間にはそれが勢力を得ようけれども、そ

れ等は漸く一年に一遍、お會式の晩に石油罐を叩い
て踊るぐらゐのもので、あとは何にも出来はしない
左様な者の間に日蓮主義の力を頼みにして居るとい
ふのは如何にも愚かなことである。今でもさういふ
坊さんがある、「まあお會式の晩に來て見て呉れ」と
言ふ、その晩だけ見たら如何にも盛なやうだけれど
も、夜が明けて翌日見たら石油罐のほかには何にも
ありはしない、お會式の晩に人が大勢集ることを以
て日蓮主義の勢力だなどと思ふ、その薄弱なる觀念
は實に憐れむべきものである。

どうしても將來は人類の思想問題の中に打込んで
この世界の思想文化の進み行く中に堅實なる基礎を
以て、堂々と闊つて行くに足る宗敎でなければなら
ない。それには先づ小乗に對する根本觀念が非常に
大事であると信じて、この小乗觀といふお話を申
した譯である。まだ話すべき事はあるけれども、大
體の要領はこれに盡きて居ると思ふ。

さてこの方針を確立して置いて、それから一切の問題を導いて行かなければならぬ、根本の方針が立たないで同じやうな所を行つたり戻つたりして居つては駄目である、どうしても小乗に對する根本觀念をハッキリとさめて、さうして一切の演説、説教、その他日蓮主義の宣傳といふものがそれから導かれて行かなければならぬ。實はモットー早く阿含の諸經を日蓮門下の坊さんや信者が精讀して、グン／＼これを應用しなければならなかつたのである。自分は國家の事に就ても非常に残念に思ふのは、彼の秀吉の時分に、日本が海外に十分に發展して居つて、支那邊りまでも勢力を伸して居つたならば、今日世界に於ける日本の地位といふものも非常に都合が宜かつたであらうと思ふ。あの時代にやるならばそんな骨を折らずして、少くとも支那の滿洲、北京ぐらゐは日本の勢力になつたであらう、随つて西伯利邊りも日本の勢力が及ぶ、さうなれば又亞米

利加邊りにも行くことが出来る、その時分には亞米利加も獨立しては居ないのであるから、米大陸も日本のものになつたかも知れぬ。餘りに徳川氏が退嬰政策を執つて、外へ向つて伸びることを抑へて、小さな内輪喧嘩をやつて居つたものであるから、日本は立後れをしてしまつた。今日以後支那なり、西伯利なり亞米利加なりを日本が支配しようといふのは非常に骨が打れる譯である。いま少し早く行つて抗の二三本も打立て、置けば何の事はなかつた譯である。これは非常に残念な事で、あんな關ヶ原の戦をやつたり、大阪の陣などをやつて豊臣氏を倒さずに、豊臣氏の天下が續いて居つたならば、自然に日本は海外に發展した譯である、親父の秀吉の考が斯うであつたといふことは、馬鹿息子でも考へざるを得ないから、自然に外に伸びて、支那も西伯利も日本の領土になつて居つたであらう。然るに今となつてはも早や後悔しても及ばぬことである。

佛教に於てもやはりその通りで、澤山ある一切經といふものを法華宗の者が小さくケチに考へて、法華經だけが自分のものだと思つて、他の良いお經を皆な蹴飛ばして居る、洵に淺ましい考である。どうしても早く法華經の勢力の下にあらゆるお經を引入れて、滿洲は日本が支配する……、西伯利も日本の勢力範圍であると云ふように、諸經を開顯應用するならば非常な大勢力になるのである。それには先づ早く棒抗ぐらゐは立てなければいかぬ、今は大急ぎにやらなければならぬ時である。そこで吾輩は「大藏經要義」といふものを著して、どんなお經でも皆な法華經の中に取容れる、これは法華經の領土であると言つて、一切經を皆なこの中に攝合したのである。殊に阿含の如きは今言ふやうな意味に於て、切つても切れぬ法華經のものであるといふことを明かにして、二千巻を取込んでしまつた、この方針が非常に大事なのである。法華の坊さんはこの後に踵い

て大に應用して呉れなければいかぬ、一人が先に行つて棒抗を立て、後から大勢の者が行つて其處に住ひ、さうして領事館を建てるといふことにならなければ完全に法華經のものにはならぬ。であるから早く阿含經はこつちのものぢやといふことを確立すれば宜いのである。他の宗旨でもその事に氣附いてやりたいと思つて居る者はある、併し悲しい故自分の奉ずるお經そのものがへんで、こなお經であつてもやうと徳川氏の退嬰政策みたやうに、外へ出て行つては危ぶない／＼といふやうな事が書いてあるものだから、今日は進退に困つて居るのである。法華經はこれに反して港がバツと開いて居つて、包容力を有つて居る、一切經は悉く法華經のものであるといふ開顯的思想を以て説かれて居るのであるから、この精神を以て阿含小乘等を法華と攝合せしむべきことを、モツと明瞭に研究して行かなければならぬ。私が斯ういふ風な態度を執り、斯ういふ話を

することが、真に見識のある人から見たならば、佛
教に貢献し、日蓮門下に貢献しつゝある功績である
と許さるると信じて居る次第である。(完)

正 誤

頁	段	行	誤	正
三	下	七	二十年にしから	二十年にしかなら
二六	上	八	自在、神力	自在神力
二八	上	一	子に與へて	子に與へて
三四	上	六	臂	臂
三六	下	八	三法式	三寶式
三七	下	五	同	同

教

第四卷 第三號

人我世 御製數首 明治大帝
 心日界 佛教復活の先序(其二) 本多大僧正
 教本思 聖語數節 立正大師
 化人潮 記 事
 ののの 知法思國會懇談會
 燈自融 教化の偉力
 明重合

毎月十一日發行 一部金拾錢 (郵税五厘)

發行所 『教』發行所

東京府下品川町南品川四一二
 振替東京一〇九四〇番

日什大正師略傳

(第六回)

故檀大僧正 竹内日照師記

九、決死の諫訴

上人は諸弟子を引きつれ京に上らんとし途中尾張
 に於いて、足利義満富士山を見んとして、尾張の津
 に着すと聞き、弟子日隨を伴ひ義満の宿所頼乗寺に
 至り諫狀を差出した警護の武士等之を逃ぎつたが上
 人強訴して止まらず遂に門外に引すり出した上人を
 より京に着し盛んに布教に努めた。

同六年上人七十六才、室町の小庵を改めて寺と爲
 し、妙塔山妙満寺と號した、今の寺町二條總本山妙
 満寺是れである、元中八年(明德二年)上人七十八
 歳足利義満が等持寺に詣するを窺ひ、死を決して庭
 中に入り、義満に直訴した、義満、松田丹波守をし

て何事なるかを尋ねさせた、上人曰く「六條坊門室
 町妙満寺二位僧都日什 日蓮所弘の法華宗の儀を訴へ
 申す」とて、安國論及び一篇の諫訴狀を呈し諫訴の
 意趣を述べた、公、諫訴狀を披見し且つ等持寺の僧
 をして安國論と諫訴狀を讀ましめたが讀むる者誘る
 者區々であつた。後安國論を返し、丹波守を以て上
 人に告げて曰く「諫訴の旨専ら經文に依り其理明白
 なり、洛中に於て弘法を屬むべし、但し諸宗誘法禁
 遇等の儀に至つては甚だ是れ難事、容易に沙汰すべ
 きにあらず、此後若し追訴せば罪過たるべきぞ」と
 上人曰く日什の言に理ありと許し給はし何ぞ宗を改
 めざるや、若し理にあらずと思はし諸宗を召合せて
 決斷を遂げ給へ、丹波守強く押し止め再び上人をし

て言語を發せしめない、上人は翌日又奉行所に至り「昨日直訴すと雖、未だ本懐を達する事を得ず、今や世悉く亂雜を極め、正法治國の道を忘れ上下貴賤皆訪法の者となる速かに忠勳を盡し賢慮を回らし之を言上し給へ」と言つた、丹波守曰く「假令如何なる事あるとも、再び言上することは出来ぬ、我れも亦即下と共に罪過に行はれんのみ」と上人慨然として退出した。

十、入 滅

上人は妙滿寺に於て一夏九十日說法し、七月二十五日京都を立出でた、其の時の和歌に

老ひが身は何處のはてに朽るとも心はずまむ堀川の水

八月三日遠州妙立寺に着し此に七日間說法しそれより見附宿玄妙寺に至り彼岸一週間說法し途中足柄山を越え和歌を詠じた

末いそぐ駒の足柄山こへて

ろに遺囑をなし同二十八日辰の刻（今の午前八時）方便品壽量品を讀誦し、唱題の間に安然として歸寂し給ふ、世壽七十九遺言に依り瀧澤の東父母の舊地に於て茶思し後遺骨を廟所に納む弟子日仁廟前に草庵を構へて之を守護した、今の妙圓寺は其の跡である。（畢）

附言

上人逝いて五百五十余年其間俊傑の法孫續出して上人の法義を宣傳した今や上人の教義を信する者十數萬を以て算するに至れりと云ふ嗚呼盛んなる哉。

（御遺稿之一 完了）

★ ★ ★ ★

★ ★ ★ ★

富士をやあとにかへり見るらん。
九月十日鎌倉に至り諸門流の僧に會見し法義を示して歸伏せしめ、二十一日武州品川本光寺に着し三日間說法し廿四日品川を出て真間に至り、十月奥州會津に歸る、日下山又次郎大に喜びて師弟を迎ふ、上人感謝して曰く、我此地を去りてより己に二十余年此の間三度の奏聞、數度の諫訴、在々所々の弘法、寺塔の建立是れ皆足下が查助に依る誰か能く此の功德を計るべきや、會津の城主草名氏又上人の歸郷を喜び法義を聽受し、上人の爲めに一字を建立した、今の顯本法華宗別格本山、寶塔山妙法寺則ちこれである。十二月十日先亡後滅法界萬靈の爲に位牌を造つて供養をした明德三年上人七十九歳兩親の年回供養を營み、同二十日、前に記せし置文三通を寫し、内二通は玄妙寺妙滿寺に贈り一通を妙法寺に置いた之を旨三通の置文と稱す、二月の初め、上人微疾を發し自ら起つべからざるを知り弟子檀越に對し懇

▼新刊▲

本多大僧正著

法華經要義

四六判約七百頁 總振かな付美本
【定價 金參圓】 送料 十八錢

日生現下生知の妙悟、法華經十卷の教義を整理し極めて平易明徹の講述なれば僧俗共に至寶たらん

◎四月下旬發賣にして三月二十日迄特價の處各地同好の士女より期間延長の申出多數に付特價二割引をば本月十五日正午迄と致し申候（但要送料）

▼案内▲

知法思國會第五回懇談會

四二

昭和四年二月二十三日(土)午後四時半より、有樂町、日本俱樂部にて本會懇談會を催し、陸軍中將井上一次閣下の「サガレンに於ける統治の弊論と思想問題」に就て約二時間左の略記せる如き極めて有益な講演があつた。

只今、本多親下から御紹介の通り、薩哈噠即ち北樺太に駐在致して居ました、其所は此の地圖に示すやうにと、鮮明な特製樺太地圖に就て夫れ、場所を指摘された後、さて薩哈噠の占領は大正九年二月に尼港事件が發生の結果であつて約五ヶ年に亘つて居ります。

自分が司令官として赴任したのは大正十二年四月から、其後十四年一月二十日北京で調印された條約に基いて同年五月十五日の撤退期限の前日十四日に引揚げたから丁度二ヶ年間ゐました。

そこで第一に住民の事を申せば薩哈噠に居住してゐる原種族は、ギリヤーク、オロチヨン及びツングースの三種であります、其文化の程度は甚だ低い幼稚なものであります、即ちギリヤーク、オロチヨンは其住宅は半土窟、半天幕で食事は鮭ばかりを常食にしてゐるのであります、軍醫に聞けば人間は鮭ばかりでも差支のないのは卵子の中にビタミンも含んでゐるからであるとの事です。又其意味な點は兄弟の一人が

結婚すればその婦人は彼等の共有物とするが如き動物状態であります。數理の觀念でも一から十迄漸く數へ得るので、日本人が鮭を買ふ時には先づ始まりと唱へ次に十尾を數へ即ち十一尾目なるに拘らず「十尾だろ」と、いふても「そうか」と云ふやうな程度であります。ツングースは少し進歩して居まして木造家屋を根據として天幕を用る遊動生活を營んで居る、しかし木造家屋と申しても便所もなければ浴室等の設備は勿論皆無で、彼等は狩獵の爲め遊動するのであります。此種族は耶蘇教を信じてゐるのもあれば又西比利亞に遊學する者もありません。

露西亞では薩哈噠占領後此の地方をば流刑地として罪人を送つてゐたから主要都市は監獄と寺院から成立し、是れに監督指導の任に當る官吏と警察官、そして少數の軍隊を置いておりましたが、一方には公會堂、學校、圖書館、病院、慈善院、氣象臺、農事試驗場等の加き文化施設も存在してゐました、露國が罪人を送る地方にも、かういふ設備をしてゐたのは参考とすべきことであります。

此地方は北緯五十度以北でありまして冬は零下三、四十度にも降るが露國式家屋は防寒設備が完全で燃料も澤山にあるから室内は誠に温かく何等生活には支障を來さない。之に反し日本軍が占領中構築した軍用道路に沿ひ出來た五十度以南の家屋は日本建築であるから實に寒い、之は是非改善の必要

を認むるので自分は冬季間縦貫軍路を巡視した事があつて之れが爲め旅館の暖房装置改善を促がすの動機となつたが五十度以北に較べると誠に貧弱なものであります。

住民の數は日本軍の占領當初は露國人約八千人と土人約二千人であつたが其後に日本人等が移住して來まして、日本人約三千人、朝鮮人約一千人、支那人約一千人の増加を見、合計一萬五千人となりましたが土地の面積は我九州位であるから人口は極めて稀薄なものであります。

そこで、日本軍の薩哈噠占領は國際法上の所謂保障占領であります。この保障占領には確固たる先例がない、又國際公法上に何等定まつた方式もないので、丁度殆んど時を同ふして歐洲には佛蘭西のルール地方占領があり、日本と佛國とが保障占領の先例を作ることになりました。處が佛國のルール地方占領は軍隊で軍事占領をやりと同時に鐵道と鑛山ばかりを管理して地方行政は總て獨乙人の自治に委かしてゐたが、日本の占領は大分違つて露國主權の全部を日本で代行したのであります。新かる占領法の下に我が施政方針は露西亞從來の法規慣例を尊重し、特に教育、勸業、交通、及衛生等の施設に依つて住民の福祉を圖り、信教の自由、裁判の公平を保持したのであります。かゝる佛國と異なる方式を採つたことは將來國際法規に一新例を開いたものと思ふ。

さて憲軍事占領をしたのは露國革命の直後で、薩哈噠の秩

序は全く破壊され行政機關も文化設備も殆んど皆其機能を失ふてゐたのでありますから、占領後第一に行ふた事は秩序の恢復でありまして次に行政機關の復興と文化諸施設の整備であります。其後露人の福祉増進の爲めに我軍の行ふた主要なることは

- 一、主要都市に諮詢機關を設置し、行政に關する意見を徴し
- 二、學校を増設し上級生には日本語を教へて日露の親善を計り
- 三、農事試驗場を改善し、種畜所をも設置し
- 四、鮭の人工孵化場及養殖場の新設
- 五、橋梁の改修並に増設
- 六、樺橋の改修繋舟溜の新設
- 七、寺院の修理と露人僧侶の優遇を行ひ且つ波蘭土人の獨立を認むると共に其寺院にも及ぼし
- 八、亞港の水道工事新設
- 九、陸軍病院の施設
- 十、貧民の救恤

などでありまして、電燈會社をも設立して初めて電燈を使用することとなりました、尙ほ日本人の増加に伴つて小學校を開設し上級生には露語を教へたり、又墓地や火葬場迄も設備しました。日本僧侶では眞宗と禪宗から來て居られました

が、主として葬儀と法要で大した活動も見ず消極的な仕事のみでありました。此地方は昔、日蓮宗の日持上人が海外布教の第一先驅者であつた歴史を有すると共に一層の活動を希望して居りましたが、此文通の便もよくない所へ昔能くお出になつたものと思ひます。

兎に角従来あつた諸施設に一段の進歩を興へ着々と移つたから住民は皆一同に感謝を以て迎へてゐました。是れも要するに我建國の精神に基いて恩威並び行ふたのであつて一時的の間にあはせてなく、其住民の幸福増進と文化發展に努力したのであります。換言すれば一般施政の原則である公正平等を經とし、正義人道を緯としたもので、今後尙ほ社會諸施設を完成せしめねばならぬと考へて小公園も作れば街路樹も植へたりしてゐる際に撤兵することになつたのであります。

北京交渉の結果勞農露國の全權一行十二名は護衛兵若干を伴ひ大正十四年三月十六日閩官海峡を越へて我占領地域に來着したので、豫め用意して置た行政の引渡し及び占領終了に關する細目協定を行ひまして五月十四日正午最後の船で無事に引揚げました。今露國全權との交渉で感じた點を述べますと、第一に先方は委員制度で外務次官を長に辯護士であつた行政官二名と軍隊指揮官一名より成り其他は補佐官でありました。此等は革命に成功した若手のみでありまして、我が全權は私一人でありましたから四人を相手とすることは中中困

を忘れ公に奉じ」の大精神を徹底し事實に現はさねばならぬと衷心から深く感じます。

今一つの例は赤十字救護班の交代に際して彼等は能く日本の赤十字事業を理解し看護婦達の奉仕に對して何とか酬いたいが、それには社員となる事が宜しいと考へて露人のみならず、日本人、支那人、朝鮮人を併せ合計四百名からの新入社があつたこととあります。素を洗へば彼等は犯罪者で流刑された者であるが、しかも此人道上又社會共存上の歎念が強いのは深く考ふべき點と念ふのであります。

それから帝國軍隊の引揚げに際しては露西亞人支那人や朝鮮人等から惜別の感謝状と記念品を呉れました。勞農露國の全權も軍隊も極めて鄭重懇懇に我が軍隊を饒りまして出發の朝、彼我軍隊は敬禮を交換し棧橋側の家屋に於て最後の調印をして別れたのであります。

我が軍の撤退後、オハに於ける北樺太石油會社の事業も、ズーエに於ける北樺太炭礦會社の事業も安全に經營してゐるようであります。時には勞働者の數に關して問題を惹き起こすものがあるが、それは彼等當事者の主義の相違からで、譬へば五と五ならばよいが、六と四にしようとするれば云ふ事を聞かぬといふやうな譯であります。又ピアノの如きは贅澤品として税關で頗る高率を課税せられます。北海道の林檎等も同様高い關稅を拂はねばなりません。生活の必需品でないとの見

難でありました。それから保障占領に對する彼我の見解の相違で彼等は佛蘭西式を主張し今迄日本の行ふた事は餘計な事であると主張したが、我が行ふた本旨を理解せしめ、好都合に運んだ。次に彼我軍隊の敬禮の交換なども従来帝國軍には赤露軍隊を主義相容れざる者と教育してあつたから随分苦心した。又國旗掲揚に就て、個人の財産權等の問題に就て、幾多の論難を経、幸にも我主張の總てを認めしむる事が出来て無事に協定が出来た事は全く歡ばしいことであります。

それから帝國軍の占領中の施政に對して在住民がどう感じてゐたか、いかに反影したかといふ事を申し上げますと、心から感謝しておつたのであります。今其實例を申せばかの大震災のあつた時に第一着に馳付けたのは露國の總代でありまして「誠に同情に堪へません、早速義捐金を募りたいから許して頂きたい」といふので、私は彼等の至誠を感謝し、「飲んで取次ぐから」といひましたが直ちに募集に着手し露國民のみならず各民族のものを合して一萬餘圓の總額が自發的に出来たのであります。全住民の合計は土人を除き一萬三千人でありますから、帝國人民七千萬として五千萬圓の義捐金と同等な譯である。露國人が其文化施設のみならず人道上の考察、又は相互扶助等に就て中々進んだ考を以てゐたことは我等の參考資料とすべき點と思ひます。日本人は兎角利己の爲めには惜しまないが公共事業には愚圖々々いふものが尠くない。私

解からであります。これは餘談であります。土人ワンダースの如きは我軍に大に感謝を表し、昨今は南樺太に移住して來た者もあります。要するに在住民を擧げて満足を得たと思ふのであります。

元來薩哈噠の統治は異種族、特に従来は優等國民としてゐた白人種に對する統治であつたことに於て多大な趣味のあることであります。然るに各民族を擧げて満足を得たことは勿論、陛下の御稜威は申迄もなく、前任者の努力の結果であります。唯白人でも支那人でも鮮人でも皆公正平等に取扱ひ時には土人とも食事を共にした事もあり、正義觀念と人道主義の此二つを基礎としてやりました。も一つ力を入れたのは社會政策で一般人民に對し出來る丈の施設を行つたのであります。其結果衣食住は勿論、精神上にも大きな慰安を興へたので、露西亞の專政に、次ぎに革命で破壊政治が行はれた後に我國の仁政即ち王道政治により威徳併び行つたものでありますから彼等を感じたのであります。

薩哈噠の體験で、日本の現在を思ふ時には疎然たるものがあるのであります。目下我國は思想界は勿論、政治、經濟共に國難に類しておりますから思想界は更らに惡影響を受けて居ります。加ふるに太平洋を距つる米國の極端な民主主義にかぶれてゐる、試みに東京譯から目を放せば北米の五、六十萬の都會その儘で總てが亞米利加式である、銀行でも、事務

所でも新しい所は米國文明の侵略を蒙つてゐることは争はれぬ事實で、之は日本としては非常に考へねばならぬことである。又日本海を距てて勞農露西亞があるが共產主義で世界統一をやるうとしてゐる、これが大きな潛勢力を以て國內に入つてゐる、彼等の教育主義や醫者の國有などは決して馬鹿に出来ない。其上お隣りの支那は三民主義で政治は北米化し、政治機關は露西亞式を採つてゐる、現に最近馮玉祥は寺院を悉く勞働者の無料宿泊所とか俱樂部式のものに充て之に異説を稱へ反抗した僧侶一万余人を殺した寧ろ勞農以上を置似てゐる。かゝる北米と露西亞と支那の中間にある我日本は堅く腹を固めて堅實なる基礎を定めて置かねばならぬ、是れが爲には我國の長所は之を採るに吝かであつてはならぬ。第一に國體の尊嚴を子供の時から一層力を入れて教へ込んでおく事が大切である政治のやり方は君民一致の大精神で以て行ひ決して私意を交へてはならない。今一つ社會政策をモット廣汎にやつて精神的にも經濟的にも實行されねばならぬ。斯かる社會政策を行ふには財政上の問題が伴ふことは大なる困難であるが一方精神上の安定といひ、生活上の満足といふ人間の要求は止る所を知らぬから其處に國民に大安神を興ふるものは宗教の信念である。

今や國民は八方塞がりの有様にあるが之を打開するの道は色々あるであらうが、何は措て置き各自が徳を養ひ仁を以て

教 報

東京統一團本部教報

- 昭和四年一月六日例に依り統一團の新年宴會を午後一時から開いた、アログラムは(一)國體會、(二)總裁陛下の講話、(三)團員代表挨拶(陸軍少將小原正恒閣下)、(四)宴會、(五)團員五分演説(六)余興、(七)萬歳(海軍中將佐藤卓藏閣下)發聲の順序による、來會者百四十二名余興に團員の神作氏の民謡八、川崎妙道會員栗本政吉氏の自強演説等にして同五時樂しく閉會した。
- 二十日(第三日曜)當日は總裁陛下の天盃拜領を記念する爲自坊妙國寺に於て社會教化大演會を開くことと成つた爲に統一團の日曜演會を品川妙國寺に合併開催す其細詳は既記の通り。
- 廿三日午後一時より統一團に於て地明會例會法要の後講演「福音五大部の綱要」本多會長現下
- 三月三日(第一日曜)午後一時半開會、法要の後講演「福音五大部の綜合觀其一」本多日生現下來會者七十名
- 十七日(第三日曜)午後一時半開會法要の後講演「福音五大部の綜合觀其二」本多日生現下來會者八十名
- 廿五日午後一時半開會例會法要の後講演「最後當業の喜び」本多會長現下 當日

他に臨む事である、爲政家にもつと宗教觀念を有つてほしい法律や建築ばかりで文化の満足は得られぬ。外交でも徳を除外して威のみを以て臨んでも、決して其目的を達するを得ない、我國目下の八方塞がりも要するに是等大欠陥の爲めであらうと憂ております。

北米でも勞農露國でも皆一の理想に向つて猛烈に進軍してゐるが我が日本は何故に徳は六合に治く威は八紘に振ふの大理想に向つて猛進せぬのであらうか、隨つて知法思國の觀念の如きも非常に乏しい、本會の如きは益隆盛に趣き帝國理想の實現に貢獻せられんことを切望致します。

右に對して 本多現下感謝の辭あり。會食後の懇談に 浦川秀吉、伊東竹三郎、佐藤海太郎、釋 眞誓などの諸氏や本多現下の夫れ「思想問題に關する所感」に就て感興多き按歴あつて談論に華咲き隔意なき極めて意義ある集會にて午後十時散會した。

世尊諸の比丘に告げたまはく、我れ世間と諍はず、世間の法を我は自知し自覺して人の爲に分別し演説し顯示す。首にして無目なる者は知らず見ざるなり。

(雜阿含經卷之二)

は宮岡ふさ子女史が十有余年の地明會幹事を引退なさつたので閉會後同女史の爲に川原幹事がお骨折りで記念慰勞感會を開きました會長からは記念品と感謝狀を贈られ永年の勞を稱はられましたに對し同女史は衷心から感戴されると共に今後も隨に會の爲に盡力さるゝ事を誓つて佛祖に報恩の唱題を捧げられました、風は烈しかったが來會者八十余名

名古屋教報

- 二月五日夜 婦人會 感應に就て 教化會館
- 原田日男師
- 十八日夜 開日鈔講義 教化會館原田師
- 廿一日午前九時半 豊田本社 同午後二時第
- 赤紡織 原田日男師
- 廿二日午前十時 押切工場 同午後二時敷下
- 工場 原田日男師
- 廿三日午後一時より新川工場 原田日男師
- 廿四日零時半 豊田織機 同二時半大洋紡
- 山内櫻漢氏
- 廿五日零時半 車輪會社 山内櫻漢氏

大阪教報

- 二月八日蓮成寺にて談話會、大庭、水也田本ノ宮、和井田 京藤藤氏の信仰に對する所感演説ありて近來になき盛會なりき。●十二日堂開寺にて法國冥合武田氏、誠の心大庭氏、日蓮主義清原氏、佛教とは何ぞや京藤師、●十六日蓮聖人降誕會午後一時第一會場蓮成寺

神戸活動史

昭和三年九月廿四日午後三時半より縣立第一神戸高女にて第七回法華經要義研究會開催 講師本多大僧正現下、同日午後七時より立正寺にて主日蓮義大講演會開催、講題、信念の力と光 本多大僧正現下、十月二十日午後六時より宗祖龍の口御法華會執行修法後信從有志者の五分演説あり。一、諸天も捨て給へ諸難にもあへ林重太郎氏、一、所感 井上 猛氏、一、健全思想の所有者日蓮 日暮光道師、一、信念の力 熊井持命布教師、同二十一日縣女にて第八回法華經要義研究會



目 次

各地教報.....	釋尊降誕の大因縁.....
	本多日生
	本多日生

